

平成29年度
第3回 対策地域内廃棄物処理業務等（減容化处理）に係るアドバイザー委員会
議事要旨

日時：平成29年12月19日（火） 9:30～12:00

場所：TKP東京駅前カンファレンスセンターカンファレンスルーム9A

出席委員（敬称略）

国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター センター長	大迫 政浩
岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授	川本 克也
国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター 基盤技術・物質管理研究室 室長	倉持 秀敏
京都大学大学院 地球環境学堂 地球益学廊 教授	高岡 昌輝
国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター 客員研究員	高田 光康
京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 教授	米田 稔

オブザーバー

福島県生活環境部一般廃棄物課 主幹	富永 幸宏
-------------------	-------

議事要旨

I 本日の議事

1. 開閉所農林業系廃棄物処理業務（減容化处理）について
2. 広野町災害廃棄物代行処理業務（減容化处理）について

II 質疑応答

1. 開閉所農林業系廃棄物処理業務（減容化处理）について
冒頭、三菱・大林・東亜共同企業体（以降、三菱・大林・東亜JVと記載）より、業務内容について説明があった。

(1) 排ガス中の窒素酸化物の濃度管理について

委員より、牛ふん堆肥が多いことから、燃焼によって排ガス中の窒素酸化物濃度が増加するのではないかと質問があった。三菱・大林・東亜JVより、牛ふん堆肥の搬入量を事前の収集過程で把握し、搬入物の状態に応じて運転を調整できるようになっており、現時点で排ガス中の窒素酸化物濃度の管理はできているとの回答があった。

(2) ほだ木と牛ふん堆肥の燃焼管理について

委員より、ほだ木と牛ふん堆肥の燃焼管理について質問があった。三菱・大林・東亜JVより、当初は混合ヤードでホイールローダを使用し、ほだ木と牛ふん堆肥を混合することで

性状の均一化を図る運転をしていたが、ほだ木量が牛ふん堆肥量に比べて少ないことから、ほだ木が牛ふん堆肥に包まれて燃えにくい状況であったため、現状では交互に供給し、炉内温度を維持しているとの回答があった。

(3) 主灰の水分調整について

委員より、主灰の水分調整として、いくつかの方法を実施しているが、今後いずれかの方法に集約するののかとの質問があった。三菱・大林・東亜 JV より、主灰の性状は処理対象物によって異なるため、状況に応じて選定していくとの回答があった。

(4) 廃棄物中の放射性物質濃度について

委員より、廃棄物中の放射性物質濃度が保管開始時に測定されたものと最近測定したものとで大きく異なるのは水分の影響かという質問があった。三菱・大林・東亜 JV より、サンプルの採取条件や測定方法によるものと考えており、引き続き分析を実施する予定であるとの回答があった。

2. 広野町災害廃棄物代行処理業務（減容化処理）について

冒頭、新日鉄住金エンジニアリングより、業務内容について説明があった。

(1) 解体後の土壌汚染調査について

委員より、解体後の放射性物質に係る土壌汚染調査の土壌採取深度について質問があった。新日鉄住金エンジニアリングより、表層から 5cm を採取する予定であるとの回答があった。

(2) 除染水の処理方法について

委員より、放射性セシウムの吸着材としてゼオライト系の粉末を使用したことについて、除染水中の塩分濃度が高いとゼオライトの吸着能力が低下すること及び飛灰からの放射性セシウムの溶出率が低いとの調査結果もあることから、これらを考慮して排水処理施設を設計すると良いとの意見があった。

(3) 除染効果のばらつきについて

委員より、ガス冷却塔除染前後の表面汚染密度の増減率が場所によってばらつきがあることについて耐火物の種類が違うのかとの質問があった。新日鉄住金エンジニアリングより、耐火物の種類は同じだが、放射性セシウムの耐火物への浸透度が温度に影響されると考えているとの回答があった。また、補足として耐火物を 1cm 毎に切断して測定したところ、放射性セシウムは表面の 1cm にとどまっていたとの説明があった。

(4) 作業員の放射線被ばく量について

委員より、作業員の放射線内部被ばくに対する健康管理について質問があった。新日鉄

住金エンジニアリングより、解体撤去工事の前後にホールボディカウンタによる検査と電離放射線健康診断を実施したが結果は問題なかったとの回答があった。

以上